

住居の中間領域の日常的活用が醸成する 都市の公共性 -郡上八幡の町屋での実践を通じて-

藤本 秀哉¹・佐々木 葉²

¹ 学生会員 早稲田大学大学院 創造理工学研究科建設工学専攻
(〒169-8555 東京都新宿区大久保 3-4-1) E-mail: shuya89@fuji.waseda.jp

² フェロー会員 早稲田大学教授 創造理工学部社会環境工学科
(〒169-8555 東京都新宿区大久保 3-4-1) E-mail: yoh@waseda.jp

公共性の観点から都市を考える際、日本の伝統的な町屋にみられる軒下や土間といった公私の境界が曖昧な中間領域は他者との出逢いや対話を通して公共性を育む機会を提供する空間と捉えられる。またそのような中間領域をどう認識するかは、主体自身の意識や日常的ふるまいにも依存すると考えられる。本研究では、郡上八幡の町屋において中間領域を開く活動を実践し、これに対する周辺住民へのアンケート調査を実施した。分析の結果、訪問経験および活動内容理解の実態、対象への認識と回答者自身の中間領域の使い方との関連性を明らかにした。これをふまえて中間領域の日常的活用が都市の公共性を醸成する可能性について考察した。

Key Words: 中間領域, 公共性, 郡上八幡, 町屋, アンケート調査

1. 序論

(1) 背景と目的

近年、「コモニング」や「コ・デザイン」など、自己である私と異なる未知なる他者との出逢いや関わり合いによって社会課題の解決を期待する議論が盛んであり¹⁾、人々の対話が行われる舞台である都市空間のあり方が公共性の観点から問われている。斎藤²⁾によると、公共性が成立するためには、オープンであり、閉じた領域をもたず、誰もがアクセスしうる空間があることを挙げ、更に異なる複数の価値や意見が生成される<間>の空間が不可欠であると述べている。このように構成される空間の代表例として、日本の伝統的な住居タイプである町屋が有する土間や軒先といった公私の境界部の空間が挙げられる。街路と住居という、公的空間と私的空間が隣接する境界空間は、内部と外部の双方の性質を持つ曖昧な領域、すなわち中間領域であり、様々な他者が入り込む余地のある空間である。

はじめに述べた問題意識を据えた筆者らは、その実践的取り組みとして、岐阜県郡上市八幡町の中心市街地（以下、郡上八幡）に位置する一軒の町屋を早稲田大学

景観・デザイン研究室のサテライトラボ「sacco lab.」として活用して、まちに開かれた空間であることを目指し、軒下空間の能動的活用を通じた公的空間への私的な活動風景の表出に取り組んでいる。

一方、都市空間の公共性について考えるとき、物的な空間構成が与える影響のみならず、その空間に身を置く主体自身の他者に対する見方の違いも重要である。既往の論考³⁾では、私が一人でなく他者と同じ世界を生きているという間主観性は、「眺めの中に人がいて、その人のふるまいを認め、それについて思いを巡らす、という風景体験」の蓄積によって獲得されると、自身の体験とその感覚に基づき現象学的に論じている。であるならば、主体自身の中間領域におけるふるまいの経験や持ち合わせた感覚が、他者が行う中間領域での活動に対して持つ認識に、影響を与えることが考えられ、その影響関係の一端を示すことは、都市の公共性の議論に対し有用な知見を提供できると考える。

以上の背景より本稿は、sacco lab.の中間領域における活動について周辺住民向けにアンケート調査を行い、対象の活動に対して持たれている認識を把握するとともに、その認識と回答者自身が関わる中間領域の様相との関連

性を明らかにする。以上より、中間領域の日常的活用が都市の公共性を醸成する可能性について考察する。

(2) 既存研究と本研究の位置付け

都市・建築分野において、中間領域に着目した研究は継続して行われてきた。境界部分にあたる中間領域を人々の抱く認識と関連付けて論じる研究として、一海ら³⁾は、住宅街路の公私間の仕切り方が与える心理的影響について、住民の私的立場と歩行者の公的立場の双方から、物理的要素との関わりに着目して論じている。また、北原ら⁴⁾による研究では、住居の周りの空間に対する認識やプライバシーに関する考え方、近隣づきあいの状況などの「住みつき態度」と、日頃の空間整備実態とが関連することを明らかにしている。一方で、あふれ出しや表出といった中間領域の構成要素に着目し、それらの類型化等によって空間の特徴を体系的に示す研究として、渡辺ら⁵⁾によるものもある。本研究は、前者の中間領域に対する人々の認識について扱う研究に準ずるものの、調査者自身が中間領域の設えや活動を行う主体であることに独自性がある。活動主体の施した設えと活動の意図やそこでの経験等を踏まえ、当事者性を持ちあわせて調査し、成果をのちの活動に反映できると考えられる。

(3) 本研究の構成・研究方法

本研究では、調査者自らが実践者となり、中間領域における設えと活動を展開し、これに関わるアンケート調査の統計分析を中心に進める。2章では、saoco lab.が位置する郡上八幡と実践活動の概要を整理する。3章で、周辺地域の住民を対象としたアンケート調査の内容と実施要項についてその概要を示し、4章にて、その基礎集計と統計分析から、回答の傾向と特徴を明らかにする。以上に基づいて、5章にて実践活動を通じた地域住民のsaoco lab.に対する認識の実態とそれと関連する主体の特徴を概括し、最後に住居の中間領域の日常的活用が醸成する都市の公共性について考察する。

2. saoco lab.における実践活動の概要

(1) 郡上八幡の概要

郡上八幡は、岐阜県郡上市の中央に位置する八幡町の中心市街地を指す呼称である。都市計画区域の面積は約818ha、人口は約8,000人である⁶⁾。郡上踊りや水環境、重伝建地区の指定を受けている伝統的町並みなどの資源をもとにした観光産業が発達し、さらに行政機能や金融機関を併せ持つ市の中心市街地である。交通について、まちの主要道路が中心市街地を取り囲むように外周し、市街地内部から通過交通を減らすことで、交通混雑の解消と安心して歩ける道路づくりが目指されている⁷⁾。ま



図-1 saoco lab.の位置図

ちの構造について、まちなかを通り抜ける吉田川が市街地を南北に分ち、川の北側の地区の一部は重要伝統的建造物群保存地区に指定されており⁸⁾、その地区以外でも、町屋が地域特有の基本的なビルディングタイプであり、これらが連なるまちなみを有する。その一方で、商売の変化などを要因として、建物の開口部の減少や引き戸のドア化など、住居の密閉性を高める方向への変化が起きている⁹⁾。

(2) saoco lab.の概要

saoco lab.は、郡上八幡の一軒の町屋にて、早稲田大学景観・デザイン研究室がその分室として2022年5月に開設したサテライトラボである。研究活動の拠点として、地域住民へ研究室の成果を共有する場として、展示活動やオープンラボなどの企画を行っており、活動運営は同研究室の構成メンバーによる。位置図を図-1に示す。観光客が多く訪れるまちの中心部に対し、saoco lab.は郡上八幡のメインストリートが郡上八幡駅方面に伸びた先の住宅が多くを占める地区である新栄町(旧町名)の東端に位置する。前面道路と、吉田川に流入する武洞谷川と呼ばれる小河川とそれに沿う小道の角地であり、前面道路の幅員が建物付近を境に狭小になり、舗装が黒色アスファルトから街並みに配慮した色へと切り替わる場所であることからまちの中心部の玄関口のような場所になっている。

(3) 中間領域における実践活動

saoco lab.の建物は、間口3間奥行き9間ほどの2階建の町屋である。玄関部は開閉の自由度がある引き戸で、土間空間を有している。土間では、これまで郡上八幡を対象地に執筆された研究室の研究論文や町屋の紹介などといった主な活動のための空間になっている。活動において、地域住民との日常的なコミュニケーションは重要であり、saoco lab.は自由で開かれた場であることを目指している。そのための実践として、軒下では設えを施した

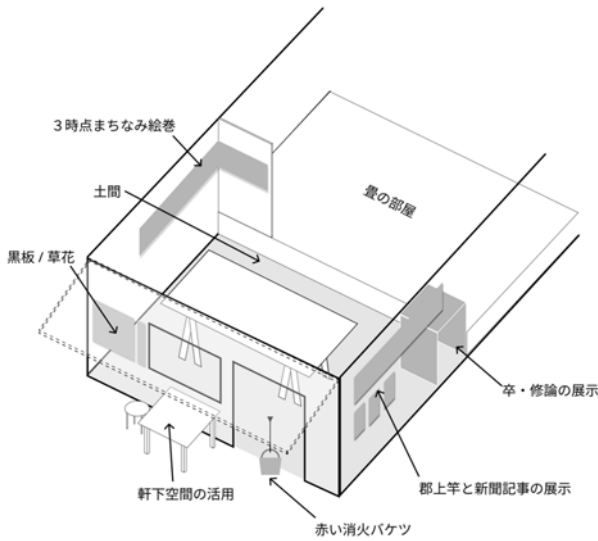


図-2 saoco lab.一階部分の設えと活動空間の図

表-1 設えと活動の概説

軒に吊り下げた赤い消火バケツ	草花
saoco lab. に在室中であることの印として、垂木の並ぶ軒裏に赤い消火バケツを吊り下げている。	第三者の介入できるきっかけとその仕掛けとして、黒板の脇にペットボトルをぶら下げて草花を活けている。
外壁に設置した黒板	saoco lab. での活動に関するポスター
滞在者の名前や滞在予定日などの情報のディスプレイとして、外壁に黒板を設置し書き込み、まちの人に伝える。	saoco lab. の活動についての説明や、季節ごとのイベントの告知のためや、地域のイベントの宣伝として、窓ガラスにポスターを貼り付けている。
戸と窓の開放	軒下空間での活動
日常的な動作として、気候に応じて窓と戸を開放している。	日常的な活動として、軒下にテーブルや椅子を設置し、その場で過ごしている
研究成果として卒業・修士論文の展示	日常的な活動スペースとしての利用
研究室で郡上八幡を対象地とした研究論文を展示している。	土間にテーブル・椅子を配置し、土間を日常的な生活空間としている。
三時点まちなみ絵巻の展示	郡上竿とそれに関する新聞記事の展示
研究室の研究成果として、1999年・2010年・2020年の三時点で撮影したまちなかの建物のファサード写真を横に並べ作成した絵巻を展示している。	saoco lab. の町屋の元居住者が卒職人であったことから、町屋の紹介の一部としてその職人が制作した竿とそれに関する新聞記事の切り抜きを展示している。



図-3 saoco lab.のファサードと軒下での活動風景

り、活動風景が通りから見られるように活動を展開している。具体的な活動や設えとその位置を示す建物一階部の模式図を図-2 に、それぞれの設えと活動の概説を表-1 に、その様相を図-3 に示す。

表-2 アンケート調査の概要と配布要領

対象者	saoco lab. が位置する通りから外側に概ね二街区の範囲にある建物 (新栄町・栄町の全域と新町・大正町・榎方町・城南町の一部)
配布部数	300部
配布期間	2023年11月14日, 16日, 17日
配布方法	ポスティングまたは手渡し, Google form
回収方法	saoco lab. のポストへの投函, formでの回答
回収数	73部 (回収率: 24.3%)

表-3 アンケートの質問項目

活動の認知度に関するもの
saoco lab. の活動の認知・saoco lab. の名称の認知・訪問歴
活動に対する印象に関するもの
大学の研究室の分室がまちにあることに対して感じている印象・saoco lab. の展示や活動の様子について感じている印象
活動と設えの認知に関するもの
学生の研究論文の展示/郡上竿や新聞記事の展示/まちなみ写真の展示/学生や教員の活動の様子/お話し/子どもたちとの交流/赤い消火バケツ/草花/ポスター/黒板/軒下の活動風景の11項目に関する風景体験・中間領域の使い方と様子・中間領域の使い方の変化履歴・中間領域の使い方の変化理由
回答者の属性に関するもの
年齢・居住歴・家または店の形態・まちなかでの移動手段・まちなかへ出かける頻度・まちなかへの移動目的



図-4 配布したアンケート用紙 (一部)

3. 研究の方法

(1) 調査内容

本研究では、saoco lab.に対する認識についてその実態と傾向を明らかにするために、選択式の設問項目を中心としたアンケート調査を実施した(表-2)。設問は、saoco lab.での活動やそこでの経験に基づいて作成している。各設問は、活動についての認知を問う「私たちの活動について」、活動に対して抱いている印象を問う「私たちの活動に対する印象について」、具体的な展示や活動の認知と回答者自身の中間領域での暮らしぶりについて問う「私たちの活動の様子について」、年齢や居住歴などを問う「あなたご自身について」の4項目から構成されている(表-3)。

(2) アンケート調査の実施

以上の項目をA4版4ページにまとめた質問紙（図-4）を、saoco lab. が位置する通りから外側に概ね二街区の範囲にある建物の居住者に手渡し、もしくはポスティングによって300部配布した。アンケートの回収方法については、saoco lab. の郵便受けへの投函、Google formでの回答の2通りで回収を行い、合計73件（回収率：24.3%）の回答を得た。

4. 中間領域に対する認識の実態とその特徴

(1) 認識の実態

a) 回答者の基本的属性

表-4に、回答者の属性の概要を示す。年齢に関して、61-70歳が最も多く、アンケート回答者全体の約70%が61歳以上であった。郡上八幡での合計の居住歴に関して、30年以上が59名（約81%）であった。中間領域の活用方法に影響を持つと想定される住まいの形態に関して、55名が住居のみで、住居と店舗を兼ねた建物と回答する人は18名（約25%）であった。

b) saoco lab.の認知度・訪問経験

表-5より、回答者のうちsaoco lab.の活動の存在について少なからず「知っている」と回答した人は全体の約86%である一方で、実際にsaoco lab.への訪問経験があると回答したのは全体の約17%であった。

c) saoco lab.に対する印象

表-6にsaoco lab.に対する印象についての回答の内訳を示す。「大学の研究室の分室(saoco lab.)がまちにあることについて」の印象の回答では、「大学生がいて新鮮な感じがする」が最も多かった。一方で「何をしているか分からない」の回答が21件（約29%）あり、具体的な活動内容については十分に周知されていないと推察される。また、「saoco lab.の展示や活動の様子について」の印象では、「活動の様子が外から見えるのが良い」の回答が22件（約30%）あった一方で、「入りづらい雰囲気がある」の回答が17件（約23%）あり、入りづらさを感じている人がいることを確認できた。

d) 中間領域における活動に対する認知度

図-5に具体的な設えと活動に対する認知度の回答の内訳を示す。全体の傾向として、軒下の設えと活動の認知度が高く、不特定の場所の活動、町屋の中の展示や活動の順に認知度が低くなる傾向が見られた。この傾向は、訪問経験の有無が影響している可能性が考えられる。

(2) 印象と実践活動に対する認知の相関分析

saoco lab.に対する印象と関連がある、中間領域での設えと活動の認知傾向を把握するために、両者の選択肢の組み合わせでファイ係数^{注2)注3)}を用いて相関分析を行っ

表-4 基本的属性に関する単純集計結果

年代										
10歳以下	11~20年	21~30年	31~40年	41~50年	51~60年	61~70年	71~80年	81歳以上	答えなし	
0	0	1	2	5	13	25	18	8	1	
0%	0%	1%	3%	7%	18%	34%	25%	11%	1%	

居住歴					
5年以下	5~10年	11~20年	21~30年	30年以上	答えなし
4	2	2	6	59	0
5%	3%	3%	8%	81%	0%

表-5 実践活動の認知に関する単純集計結果

活動の認知に対する回答 (73)				saoco lab.への来訪経験に対する回答			
よく知っている	だいたい知っている	見た・聞いたことはある	知らない	二回以上ある	一回だけある	通りがかりにのぞいたことがある	訪れたことがない
22	20	21	10	7	5	22	37
30%	27%	29%	14%	10%	7%	30%	51%

表-6 saoco lab.に対する印象に関する単純集計結果

大学の研究室の分室がまちにあることについての印象									
大学生がいて新鮮な感じがする	学生がいて活気が出る	まちが良くなりそう	研究活動を身近に感じられる	けるようになった	まちのことを気にかからない	何をしているか分からない	知らない人が出入りして不安	特になし	その他
44	42	32	16	7	21	0	6	12	
60%	58%	44%	22%	10%	29%	0%	8%	16%	

展示や活動の様子についての印象						
よく分からない・あまり知らない	入りづらい雰囲気がある	活動の様子が外から見えるのが良い	活動が楽しそう	軒先が賑やか	内容が難しい	その他
34	17	22	19	15	1	7
47%	23%	30%	26%	21%	1%	10%

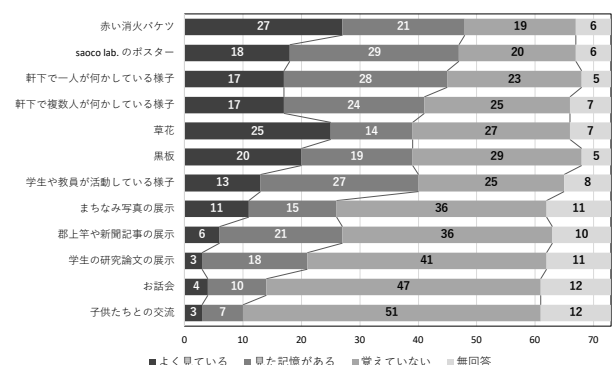


図-5 具体的な活動に対する認知度の単純集計結果

た。表-7にそれぞれの係数値を示す。「活動の様子が外から見えるのが良い」「活動が楽しそう」「大学生がいて新鮮な感じがする」「学生がいて活気が出る」「軒

表-7 中間領域での実践活動の認知の有無の組み合わせのファイ係数

		大学の研究室の分室がまちにあることの印象					サテライト研究室の展示や活動の様子についての印象					
		大学生がいて新鮮な感じがする (n=35)	学生がいて活気が出る (n=31)	研究活動を身近に感じる (n=13)	何をしているかわからない (n=17)	まちのことを気にかけるようになった (n=5)	まちが良くなりそう (n=23)	活動の様子が外から見えるのが良い (n=16)	活動が楽しそう (n=14)	軒先が賑やか (n=14)	入りづらい雰囲気がある (n=13)	よく分からない・あまり知らない (n=28)
町屋内の出来事	お話し会 (n=13)	0.15	0.14	0.40	-0.19	0.29	-0.03	0.49	0.26	0.07	-0.01	-0.31
	子供たちとの交流 (n=10)	0.06	0.22	0.51	-0.32	0.15	0.01	0.42	0.27	0.16	-0.26	-0.29
町屋内の展示	学生の研究論文の展示 (n=18)	0.29	0.22	0.34	-0.21	-0.03	-0.09	0.49	0.39	0.22	-0.02	-0.40
	郡上や新聞記事の展示 (n=23)	0.18	0.23	0.48	-0.33	0.01	0.12	0.43	0.44	0.10	-0.12	-0.35
不特定の場所の設え・活動	まちなみ写真の展示 (n=20)	0.10	0.28	0.29	-0.42	-0.09	0.29	0.60	0.34	0.25	-0.33	-0.39
	学生や教員が活動している様子 (n=31)	0.40	0.33	0.32	-0.20	0.12	0.15	0.48	0.43	0.51	-0.03	-0.50
軒下の設え	草花 (n=30)	0.30	0.30	0.16	-0.26	0.29	0.29	0.34	0.11	0.37	0.08	-0.39
	赤い消火バケツ (n=39)	0.26	0.24	0.17	0.00	0.20	0.20	0.23	0.10	0.01	0.07	-0.23
	saoco lab. のポスター (n=37)	0.36	0.25	0.21	-0.20	0.22	0.22	0.36	0.41	0.32	-0.07	-0.45
	黒板 (n=31)	0.40	0.33	0.23	-0.20	0.02	0.02	0.40	0.35	0.43	0.06	-0.50
軒下の活動	軒下で一人が何かしている様子 (n=35)	0.37	0.40	0.24	0.01	0.11	0.11	0.40	0.27	0.35	0.15	-0.52
	軒下で複数人が何かしている様子 (n=32)	0.36	0.37	0.21	-0.15	0.14	0.14	0.46	0.33	0.50	-0.05	-0.46

* ±0.0-0.25 : ほとんど相関がない, ±0.25-0.5 : やや相関がある, ±0.5-0.75 : かなり相関関係がある, ±0.75-1.0 : 強い相関関係がある

表-8 中間類型ごとの saoco lab. に対する印象に関する回答状況

クラスター	人数	大学の研究室の分室がまちにあることの印象							サテライト研究室の展示や活動の様子についての印象																		
		学生がいて活気が出る	学生がいて活気が出る	大学生がいて新鮮な感じがする	大学生がいて新鮮な感じがする	まちのことに気にかけるようになった	まちのことに気にかけるようになった	研究活動を身近に感じる	研究活動を身近に感じる	まちが良くなりそう	まちが良くなりそう	何をしているかわからない	何をしているかわからない	特になし	特になし	外から見えるのが良い	外から見えるのが良い	活動の様子が良い	活動の様子が良い	軒先が賑やか	軒先が賑やか	活動が楽しそう	活動が楽しそう	内容が難しい	内容が難しい	入りづらい雰囲気がある	入りづらい雰囲気がある
CL1	28	25	24	5	12	15	1	0	22	14	16	0	3	1	1.55	1.42	1.86	1.96	1.22	0.12	0.00	2.61	2.43	2.20	0	0.46	0.08
CL2	18	8	11	1	0	2	15	0	0	1	1	1	13	7	0.77	1.01	0.58	0.00	0.25	2.90	0.00	0.00	0.27	0.21	3.10	0.83	
CL3	15	9	9	0	4	13	0	0	0	0	2	0	1	14	1.04	1.00	0.00	1.22	1.98	0.00	0.00	0.00	0.51	0	0.29	2.00	
CL4	12	0	0	1	0	2	5	6	0	0	0	0	0	12	0.00	0.00	0.87	0.00	0.38	1.45	0.00	0.00	0.00	0	0.00	2.15	

【凡例】 < 1.5 : ■ > 0.5 : ■

* 特化係数に関して、期待値が1を下回るものは可読性のため空欄とした。

先が賑やか」の印象は軒下の設え・活動を認知している人と相関が見られた。一方で、「活動の様子が外から見えるのが良い」「活動が楽しそう」「研究活動を身近に感じる」の印象は、町屋の屋内の設えや活動を認知している人と相関が見られた。以上より、主体が認知している設えや活動がどこに位置するかによって、抱く印象の傾向が異なることが示唆された。

(3) 印象に基づく主体の類型とその特徴

a) クラスタ分析

本項以降では、「saoco lab.に対する印象」の設問に対する回答とその組み合わせに注目し分析を行う。具体的には、k-means法を用いて非階層クラスタ分析を行い^{注4)}、印象に基づいた主体の類型化を行った。分析時に設定するクラスタ数については、その数を複数指定して検討した結果、各クラスタの特徴が最も反映されると考えられたクラスタ数4を採用した。クラスタ分析の結果として、表-8に4つのタイプの「saoco lab.に対する印象」の回答内訳(上段)とその特化係数^{注5)}(下段)を示す。以上に基づき各タイプの saoco lab. に対する印象の特徴を把握する。

CL1は、「学生がいて活気が出る」「まちのことを気にかけるようになった」「研究活動を身近に感じる」

「活動の様子が外から見えるのが良い」「軒先が賑やか」「活動が楽しそう」の回答が多く、特化係数が特段大きい。また、「何をしているかわからない」「入りづらい雰囲気がある」「よく分からない・あまり知らない」の回答が少なく、特化係数も特に小さい。このことから、CL1は複数の選択肢に回答しており、印象が具体的な類型と解釈できる。

CL2は、「活動の様子が外から見えるのが良い」「軒先が賑やか」「活動が楽しそう」の回答の特化係数が特段小さくなっている。また「何をしているかわからない」「入りづらい雰囲気がある」と回答する構成主体が多く特化係数も特段大きくなっている。このことから、CL2は「何をしているかわからない」かつ「入りづらい雰囲気がある」と捉える類型と解釈できる。

CL3は、「軒先が賑やか」や「活動が楽しそう」という回答した人はおらず、「よくわからない・あまり知らない」の回答が多く特化係数も大きくなっている。一方で、「まちが良くなりそう」の回答は多く、特化係数も大きくなっている。このことから、CL3は「よく分からない」一方で「まちが良くなりそう」と捉える類型と解釈できる。

CL4は、展示や活動の様子の印象として「よくわからない・あまり知らない」のみが回答され、ほかの選択肢

を回答した構成主体はいなかった。また、まちにある研究室の分室の印象として「特になし」のみが回答され、ほかの選択肢を回答した構成主体はいなかった。このことから、CL4は「よく分からない」が多く、具体的な印象を抱いていない類型と解釈できる。

b) 各類型の saoco lab. との関係度の特徴

saoco lab. の認知の有無や日常的に saoco lab. と接触する機会、訪問経験の有無など、主体自身の saoco lab. との関係度も主体が抱く印象と関係すると考えれば、両者の関連を捉えることが saoco lab. に対する認識の実態把握につながる。前節の類型を用いて、「実践活動に対する認知度」の回答内訳(上段)とその割合(下段)を表-9に、「saoco lab. への訪問経験」の回答分布を図-6に示す。これらを類型間で比較すると、具体的な印象を抱いている主体(CL1)は、活動の認知度や訪問経験があり、saoco lab. との関係度が高い傾向があることが示された。

(4) 類型化された主体の中間領域の様相の傾向

本節では、前項で整理した主体の類型ごとに、住民の中間領域の様相の傾向を把握し、認識との関連性を明らかにすることを目的とする。住民自身の家や店の前の使い方の様子に関する設問で、回答数が5以下の「テーブルを置いている」「旗を立てている」「ものを売る」を除いた14項目に対する回答と、先に示した類型とのクロス集計からコレスポネン分析を行った。その結果として、カテゴリースコアの値と相関の高い1, 2軸を用いた分布図を、各軸が元データをどれだけ説明しているかの指標となる寄与率と共に図-7に示す。第一軸と第二軸の寄与率を合計した累積寄与率は79.5%であった。

図-7より、「CL1」「CL2」「CL3・4」の3つに分かれ1・2軸上で距離を置いて配置されるとともに、類型ごとの中間領域の様相に類似する項目が配置された。それぞれの類型ごとに、その近傍に配置された項目から傾向を把握する。CL1の周辺には、「知り合いと立ち話をする」「季節の飾り付けをしている」「ポスターを貼っている」のように、時間や周辺環境の変化に対応した行為が配置されていた。CL2の周辺の要素については明示的な解釈ができなかったが、「看板を置いている」「椅子を置いている」「椅子に座る」など、本アンケート調査では回答数が少なく、稀有な行為が配置されていた。CL3・4の周辺には「自転車置く」「車を停める」「植物を育てる」といった、一般的に建物外部でのみ行われる、単目的で機能的な空間の利用行為が配置されていた。以上より、類型ごとに異なる中間領域の使い方や様相の傾向が示され、それぞれで類似性を有していると考えられる。傾向から各類型の中間領域に対する認識を解釈すると、CL1の周辺には住居内でも行われる行為が配置され、主

表-9 各類型の中間領域での活動の認知割合

認識のレベル	人数	町屋内の出来事		町屋内の展示物		不特定場所の活動		軒下の設え				軒下の活動	
		お披露出	まちまちとの交流	展示物	展示物や新設展示物の	まちまちなみ等の展示物の	まちまちなみ等の展示物の	花	赤い消火バケツ	赤い消火バケツ	旗を立てている	旗を立てている	椅子を置いている
CL1	28	11 39.3%	8 28.6%	16 57.1%	18 64.3%	20 71.4%	25 89.3%	23 82.1%	21 75.0%	26 92.9%	25 89.3%	25 89.3%	24 85.7%
CL2	18	2 11.1%	0 0.0%	4 22.2%	3 16.7%	1 5.6%	7 38.9%	10 55.6%	13 72.2%	13 72.2%	10 55.6%	13 72.2%	10 55.6%
CL3	15	1 6.7%	2 13.3%	1 6.7%	4 26.7%	3 20.0%	6 40.0%	5 33.3%	10 66.7%	7 46.7%	4 26.7%	6 40.0%	6 40.0%
CL4	12	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 16.7%	2 16.7%	2 16.7%	1 8.3%	4 33.3%	1 8.3%	0 0.0%	1 8.3%	1 8.3%

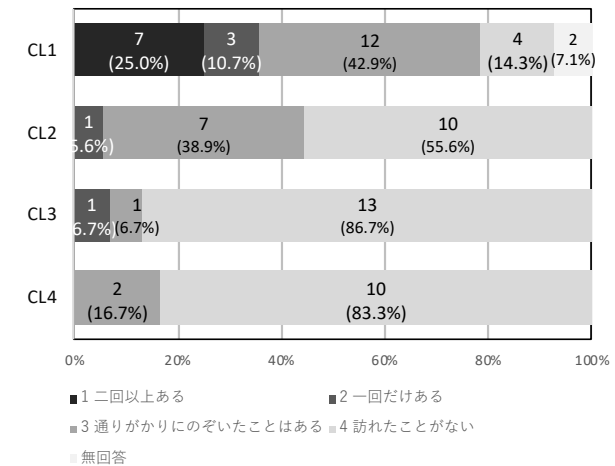


図-6 各類型の saoco lab. の訪問経験割合分布

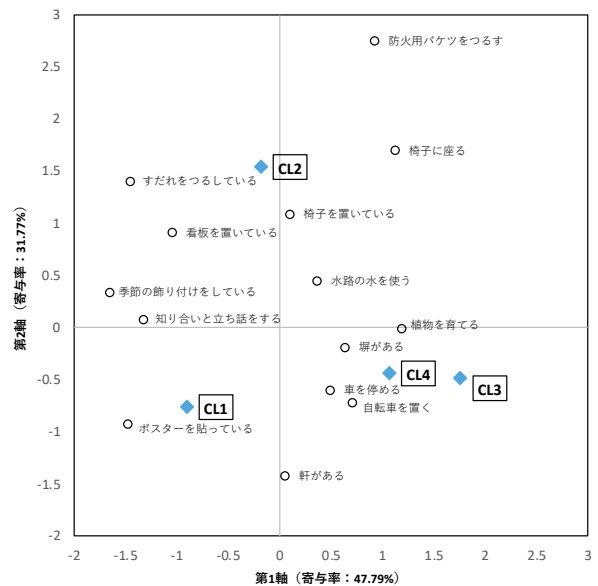


図-7 コレスポネン分析による各類型と中間領域の様相の布置

体のふるまいが建物外部にあふれ出した様相が窺える。一方で、CL3・4の周辺には、建物外部において一般的になされる行為が配置され、私的空間で行われる行為が離れて配置されていることから、私的空間と公的空間を明確に区別していると推察できる。

5. 結論

(1) 本研究の成果と課題

まず、アンケートの回答から回答者の基本属性と saoco lab. に対する印象、実践活動に対する認知度を概観し、印象と認知度の組み合わせの単相関分析によって、実践活動を認知することが主体の抱く印象に影響を与えていることを把握し、主体が認知している saoco lab. の設えや活動の位置によって、抱く印象の傾向が異なること明らかになった。次いで、印象の具体度が異なる 4 類型を抽出し、類型ごとの訪問経験や活動の認知度との関係から、saoco lab. に対する認識の実態を把握した。その結果、saoco lab. に対する印象が具体的な主体は、saoco lab. に対する認知度が高く、訪問経験があることを明らかにした。また、自身の住居の中間領域の利用傾向の相違と saoco lab. に対する印象の具体度に対応が見られる傾向を明らかにした。他方、本研究では、主体が抱いている自身の住居の中間領域に対するアクチュアルな感覚までは踏み込めておらず、今後の課題としたい。

(2) 考察

現代の住居は、防犯や断熱など住環境に求められる機能を重視し、開口部が小さく、家の内部と外部の空間を明確に区切ることが一般的である。それにより、かつての町屋にみられた縁側や軒下空間といった中間領域は失われつつある。ではどのようにして都市空間に公共性をもたらすことができるのだろうか。

研究の成果から、コレスポンデンス分析より、saoco lab. に対する印象が具体的な CL1 の近傍に「知り合いと立ち話をする」「季節の飾り付けをする」「ポスターを貼っている」という行為が付置され、それには住居内でも行われる行為が玄関前で行われているという共通項があった。住居の中間領域の様相を、主体自身の中間領域に対する認識の現れとして捉えた時、その主体にとって内と外の境界は曖昧で、「中間領域をまちとのつながりを持つ空間と捉える力」が日常的に体得されていたと考える。また、中間領域での積極的な私的利用が窺える主体は saoco lab. に対し具体的な印象を抱く傾向が示され、その主体に saoco lab. の訪問経験がある人の割合が大きくなっていったことは、その「力」により saoco lab. の中間領域についても同様に捉えていたことの証左であるといえないか。つまり、主体自身の中間領域での経験が、ある対象を外と内をつなぐ中間領域であると認識することに作用するのではないかということだ。日常的な中間領域での活動が、公共性のある都市を醸成する可能性があるといえる。

であるならば、中間領域で他者を認識し、思いめぐらせる経験が可能な環境が必要であり、その環境を生み出

すために、中間領域を実際に使ってみるという実践が必要であると考え。一方で、かつてのように住居の構造をオープンなものへと再帰を求めることは建設的ではない。いかにして、現代的な住居に中間領域での実践活動を取り入れ、また、活動に対する地域住民のかかわりしるを増やすことができるのか、建築構造に限らない住居の中間領域のデザインを議論していく必要があるだろう。

謝辞：本稿で実施したアンケートにご協力いただいた、郡上八幡の住民に感謝申し上げます。

NOTES

- 注1) 例えば、2023 年に出版された参考文献 8 は、現代の受動的な民主主義の捉え方を指摘し、それによってわたしの「こうしたい」という欲望が失われつつあると述べ、創造的な活動への欲望が内発的に育まれるためにはそれを生起させる環境に身を置くことが重要であり、その環境は異質な他者との交わり合いであると論じている。
- 注2) ファイ係数(ϕ 係数)はクロス集計表における行要素と列要素の連関の強さを示す指標である。係数値は-1~1間の値を取り、その解釈は表-7に準ずる。
- 注3) 実践活動の認知の有無については、「よく見ている・見た記憶がある」と「覚えていない」の二値に分類し、バイナリデータに変換している。
- 注4) 非階層クラスター分析においてクラスター数を複数指定して検討し、各クラスターの特徴が最も反映されていると考えられるクラスター数4を採用した。
- 注5) 特化係数は次式で求めた。これは各類型における期待値に対する観測値の割合を示している。
各類型における該当の印象の選択数 ÷ (該当の印象項目の選択数 × 類型に含まれる人数 ÷ 全体の人数)

REFERENCES

- 1) 齋藤純一：公共性(思考のフロンティア)、岩波書店、2000
- 2) 佐々木葉：風景体験の楽しみとレッスン、土木学会景観・デザイン研究講演集、No.19、pp.283-288、2023
- 3) 一海有里・清水忠男・佐藤公信・陳明石：住宅街路における公私間の仕切り方が人々に与える心理的影響、日本建築学会計画系論文集、64巻、526号、pp. 215-222、1999
- 4) 北原啓司・近江隆：住戸まわりの空間整備と住みつき態度、都市計画論文集、22巻、pp. 313-318、1987
- 5) 渡辺万紀子・天野光一・西山孝樹：街路空間における中間領域の類型化とその構成要因に関する研究、土木学会論文集 D1(景観・デザイン)、77巻、1号、pp. 17-32、2021
- 6) 郡上市：八幡都市計画マスタープラン(第2期)、2021。
- 7) 家田雅之・佐々木葉・畑場星澄：郡上八幡における町並みを構成するファサードの特徴と変化、景観・デザイン研究講演集、No.17、pp.324-329、2021
- 8) 一般社団法人公共とデザイン(石塚理華、川地真央、富樫重太)：クリエイティブデモクラシー：「わたし」から社会を変える、ソーシャルイノベーションのはじめかた、株式会社ビー・エヌ・エヌ、2023